

平成 21 年 6 月 29 日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）

研究期間：2007～2008

課題番号：19820046

研究課題名（和文） 研究者と調査対象者による、映像記録制作手法の開発と「映像アーカイブ化」の実践

研究課題名（英文） Development of a method for field work with video recording and creating visual archive by researcher and residents.

研究代表者

鈴木 岳海

立命館大学・映像学部・専任講師

研究者番号：20454506

研究成果の概要：

本研究は、社会組織の変容に関する文化人類学的調査過程において、調査者と地域住民による映像記録制作と「映像アーカイブ化」を通じて、地域連携をふまえた調査モデルづくりを目的としている。京都市静原における年中行事の調査過程で、特に地蔵盆と虫送り行事に対応する諸民族の年中行事に地域住民が関心を示すこととなった。その結果、調査者がネパール・カトマンズとスペイン・バレンシアの祭りを映像アーカイブ化することで調査者と地域住民、そして複数の地域を連環する形で映像による情報共有がなされた。当初の目的を超えて、地域住民自らが映像制作に関与することで、自身を客体化し他者への関心を促した本取り組みは、研究者と複数の調査地域の人々が、映像アーカイブ化による研究成果を連環的に相互利用できる有機的な調査モデルの形成が可能となることを示したといえる。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,200,000	0	1,200,000
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,200,000	300,000	2,500,000

研究分野：文化人類学

科研費の分科・細目：文化人類学・民俗学

キーワード：文化人類学、映像人類学、映像アーカイブ

1. 研究開始当初の背景

(1) 背景

現在、映像技術の進展により高性能の映像制作機材やソフト利用の簡便化が図られている。こうした状況になり、大学教育においては、映像制作と映像理論、映像マネジメントを総合的に学ぶ学部や学科が開設され、

大学教育と映像文化産業との連携の必要性が形となって現れてきている。また、調査研究においても、質的調査の重要性が再認識されてきており、その方法論として映像利用の可能性が叫ばれている。にもかかわらず、日本での研究、とくに人文科学、社会科学の現場においては、文字を媒体とした調査研

究と研究の発信が多くを占め、「映像」の有機的な利用が立ち遅れている。また、調査過程はもちろんのこと、調査結果が論文によるため、研究者と調査対象者との情報共有の展開はきわめて遅れている。

(2) 研究動機

本研究では映像を利用することにより、これまで分化していた研究者の専門知識と調査対象者の持つ継承的知識を横断的、有機的に組み合わせながら、専門領域のみに埋没しがちな研究システムを地域や社会に連繫した開かれたシステムとして実質的な映像利用のシステム化を提案する。

(3) 研究の特徴

実践的な共同研究であることである。文化人類学的調査と映像の利用をより有機的に組み合わせ、映像アーカイブ化と映像情報の発信を行う。その際、高度な機材の利用ではなく、大学など一研究機関の設備状況に即した現実的な映像制作、分析、情報発信の実践を多角的に試みる。

脱専門領域的な研究である。研究者は、地域の人々や社会とのつながりの中で調査をすることが前提となっており、当該地域での暮らしや人と人とのつながりなど、社会に開かれた映像メディアとしてその可能性を提案する。

現在の人文科学、社会科学研究において、映像のもつ特徴を、いかに効果的に利用できるものか、現状にあった実際的な汎用性のあるモデル作りと映像メディアのコミュニケーション・ツールとしての創造的な可能性を社会に開くことを期待する。

2. 研究の目的

本研究は、社会組織の変容に関する文化人類学的調査過程において、調査者と地域住民による映像記録制作と「映像アーカイブ化」を通じて、地域連携をふまえた調査モデル形づくりにある。

上記のモデル作りを通した本研究の目的は、次の3つが挙げられる。

(1) 映像記録を利用することで、時系列比較分析の視野も取り入れながら、静原町の年中行事にみられる社会組織の変容に関する文化人類学的調査を行う。

(2) 調査過程で記録した映像記録を映像アーカイブとして調査地域とともに共有することを試みる。

(3) 人文、社会科学研究における有機的な映像利用のシステム化を提案する。

個別具体的な目的は以下の3つである。

現在の地蔵と地蔵盆をとりまく静原の社会組織に関する文化人類学的調査を、時系列的な比較を視野に入れるために、地域の映像記録の発掘を調査研究のプロセスに組み入

れる。

地蔵と地蔵盆調査における映像利用の実践と映像記録のアーカイブ化を進める。その過程で、文化人類学的調査の過程で研究者と調査対象者とが共同で映像を記録するなど、映像によるコミュニケーション・ツールの可能性を探る。また、映像作品の発信、社会との交流 研究者と調査対象者とが共同で映像資料や映像作品制作し、調査結果はもとより、調査のプロセスをも映像により発信する方法を試行する。本研究を社会へ開かれたシステムの形態となるようする。

映像による研究に関する提言以上のような実践的な試みとして、映像利用のシステムを実際にどのようなかたちで人文科学、社会科学研究に取り込むことができるのか、国内外の研究者のみならず、映像を扱う専門家（映像制作・配信、ジャーナリズムなど）との議論や先駆的な取り組みの視察をとおして、最終的には現実的な提案を行う。

3. 研究の方法

(1) プロジェクティブインタビューイング

文献資料と映像資料から調査対象の本質論的な議論だけではなく、現代における年中行事の役割や社会組織の変容、社会的な意味合いに関する先行研究をまとめる。とくに、当該地域の年中行事を記録した映像作品を提示しながらインタビューし、時系列的比較を行うことで、何が変化し、地域住民がその変化をどのように受け入れているのか、そしてどのような変化を望んでいるのか、個別具体的な問題を検討する。

(2) 地域住民と連携した映像記録制作

本研究では、映像記録の制作が大きな位置を占めることになるが、調査者と地域住民がプロの映像制作者ではないことから、映像記録の制作には複雑な操作を必要とするプロ向けの機材を使わず、限られた設備と機材を用いる。この取り組みがあってはじめて、調査者と地域住民による持続的に連携した映像記録の制作が可能となる。

また、地蔵盆を中心とした静原町の年中行事を観察・記録するだけでなく、行事を企画する一員として参加することにより、長対象者と緊密な関係がうまれる。そうした状況の中で、調査者は地域住民の行事の関わり形を知り、お互いを認め合いながら共同して記録映像を制作することができる。記録した映像は、適宜、調査対象者と共有することで新たな調査課題を発見する。さらに、映像記録を記録手法としてだけでなく、調査者と地域住民とのコミュニケーション手法のひとつと捉えることもできる。

(3) 他の研究機関や映像制作者との交流 調査対象者との映像記録の制作と地域住民

との映像アーカイブ化のシステム構築のために、映像アーカイブを有している機関と情報交換を行う。

(4) 映像アーカイブを用いた調査者と地域を連環する調査システムの実験・実施

通常の調査では、研究者だけが情報を囲い込むことが多いが、本研究では、調査対象者とともに調査を通して映像を記録し、意見交換を行いながら情報を共有する。つまり、調査研究から映像記録を介して地域住民へ、そして、地域住民から調査研究へ常にフィードバックする連環システムのインターネットを利用した実験を実施する。また、映像記録が研究の面だけではなく、地域住民や地域の活動へ利用されるような「暮らしを豊かにするツールとしての調査研究と映像記録」として地域還元されることも実験する。

4. 研究成果：

(1) 本研究の結果、研究者と京都市静原の調査対象者による映像記録制作と地域住民との「映像アーカイブ化」を实践にむけた取り組みの第一歩として、文献資料と映像資料から調査対象の先行研究を収集・整理した。

具体的には、調査者が行った学会発表の共同発表者が調査を行った京阪神地域の地蔵と地蔵盆に関する映像資料を地域住民に視聴してもらいながら整理することができた。また、この映像資料を介した発表により、発表者間による議論が活発になり、写真や動画資料はもちろん、書籍の挿絵や絵本までも資料として利用できる可能性が高いことが明らかになった。

さらに、現在立命館大学映像学部大森康宏教授が30年前に撮影した男子成人儀礼である烏帽子儀の記録映画を上映することで、過去と現在の烏帽子儀に関して映像的に時系列比較を行った。その際、過去の映像記録に登場した地域住民により、過去から現在への変化について議論がなされただけでなく、再来年に予定される烏帽子儀に過去の儀礼の様式を採った形で行うための資料としての価値が改めて見直された。

(2) 京都市静原の年中行事である地蔵盆と虫送り行事を主要対象として、女子成人儀礼である御幸持ち、一年間の収穫に感謝し冬の火伏せ行事あるお火焚き祭、新年に備えたいしめ縄作り、静原神社の元旦準備から大晦日、新年の様子を調査対象者と共同して映像に記録した。これらの記録は前述の大森康宏が撮影していない行事も含まれ、その資料的価値と映像アーカイブとして今後利用されることになる。

(3) 京都市静原町の年中行事を映像記録するのと同時に、行事を通して主催者である

静原の人々と交流し、静原町の社会組織と年中行事の変容に関するインタビューを行った。現在の経済・社会状況から、地域住民の年中行事への関わり方とその形式の変更を余儀なくされていること、一方で、変化してきた年中行事を過去の形に戻そうとする動きが盛んになっていることが分かった。また、静原に見られる特殊な社会組織も近代化された現在に適應する形へと変化する必要性の是非を問うような議論の兆しも現れてきている。そのため、室町から続いてきたと言われている烏帽子儀をはじめ、組織により役割が設定されているほぼすべての年中行事の運営にもその影響が現れる可能性があることを知ることができた。

(4) 調査地は、本プロジェクトの主調査地である京都市静原町と地蔵盆の比較調査をおこなう神戸市東灘区西青木地区、さらに、日本と比較するため、ヒンドゥー教と仏教の像が街に散在するネパールでの調査もおこなった。ネパールでは、石像の種類や形状、街区における分布調査、さらに、早朝の石像へのプジャ（儀礼の一種、お供えと祈り）の調査をおこなうことで、神仏と人々との関係を探った。この調査において、ネパールと静原の地域住民に対して、ネパールの年中行事の記録映像をコミュニケーションツールとして利用し、映像的に比較しインタビュー撮影することで、年中行事の意味づけに関する調査をおこなった。

また、ネパール調査のなかで、通常は記録できないパタン市のゴールデン temple で月に一度おこなわれている僧侶の交代式を映像記録として残すことができた。僧侶になると、1ヶ月の間、日常生活を送ることができないため、この映像記録から現代社会の文脈で年中行事のはたす役割と宗教と社会との関わりを知ることができ、静原にそのような視点を適用することの意義を認められた。

(5) ネパールの調査では、関西学院大学のネパール研究者らとの交流を通して、ネパール文化の映像アーカイブ化の必要性と取り組みの可能性について、そして映像記録の制作と地域住民との映像アーカイブ化のシステム構築のために、どのような取り組みが可能か情報交換をおこなうことができた。

(6) 火をシンボルとした虫送り行事と比較するため、ネパールの虫送り行事であるガンタ・カルナとスペインのバレンシア火祭りの調査・撮影をおこなった。

当初は予定していなかったこの調査は、京都市静原における年中行事の調査過程で、地域住民が地蔵盆と虫送り行事に対応する諸民族の年中行事に関心を示したことがその基点となった。その結果、調査者がネパール・カトマンズとスペイン・バレンシアの祭

りを映像アーカイブ化することで調査者と地域住民、そして複数の地域を連環する形で映像による情報共有がなされた。これは、当初の目的を超えて、地域住民自らが映像制作に関与することで、自身を客体化し他者への関心を促した本取り組みは、研究者と複数の調査地域の人々が、映像アーカイブ化による研究成果を連環的に相互利用できる有機的な調査モデルの形成が可能となることを示したといえる。

(7) 本研究の成果は、以下の形で発表された。京阪神地域の地蔵と地蔵盆に関して、民俗学、文化人類学、映像人類学、宗教学の立場から探った学会発表。地域による地蔵盆と人々と地蔵との関わり方の相違を映像によって比較分析した論文。調査におけるインタビュー撮影の撮影と編集技法の問題をライフヒストリー調査の視点から検討した論文。映像を利用した地蔵盆調査を映像教育の視点から見たとき、その教育効果と新規性に関して検討した報告書。地蔵盆を子供の文化との関わりで論じた報告書。

(今後の展望)

通常、調査結果は文字としてまとめられるが、言語の違う住民同士はもちろん、言語をともしする一尾問いおいても情報を共有することは難しい。しかし、本研究の取り組みにより、地域住民と共同しておこなう年中行事の調査においては、視覚的に確認でき、記憶を喚起する媒体となりうる映像アーカイブを利用することが有効であると考えられた。また、年中行事の映像記録とともにおこなったインタビューの映像記録とその視聴から、映像アーカイブの構築だけでなく、映像アーカイブを利用した調査記録そのものをアーカイブ化することも今後の調査で重要な役割を果たすと考えられる。

こうした映像記録と映像アーカイブ化は、調査対象者との共同映像記録の実践の段階から、地域住民とともに調査過程の映像記録を映像アーカイブ化に連結するような形で実践的に検討しながら、実質的なシステムとして機能することを目指す必要がある。そうすることで、映像記録の深化と映像アーカイブ化の構築とともに、さまざまなかたちで文化人類学的調査の現場や映像制作に携わる研究機関、そして、地域の映像記録を実践、指向する第三者に広く発信してゆくことができると考えられる。そして、人文科学、社会科学系の調査研究における映像記録の利用の効果を検討し、調査研究における情報の地域共有システムとして提案することも可能となるであろう。

(残る問題)

本研究は、特別な設備や機材が必要となる

ものではなく、より多くの機会で実践されるようなシステムを目指し、実践してきた。しかしそれが故にプライバシー保護や著作権問題といった映像メディアが抱える問題が立ち現れてくる。そのため、映像アーカイブとして年中行事の映像記録を蓄積してきたが、サーバー管理の下、インターネット上で映像情報を共有する試みを行わず、第三者機関等への情報発信ができなかった。この著作権の問題に取り組むことは、調査研究だけでなく、映像が氾濫する今日の社会全般にとっても、大きな意味があると考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

鈴木岳海2009『インタビュー調査映像の表現技法と諸問題・語りのコンテキストと編集のはざまから』立命館映像学vol.2 pp.71-84、査読有

鈴木岳海2008『映像から見る地蔵盆・2つの映像作品の比較から』立命館映像学vol.1 pp.45-54、査読有

[学会発表](計2件)

鈴木岳海「京阪神の地蔵盆」国際神道学会セミナー甲南大学2008年2月

鈴木岳海「手のひらの地蔵盆」日本文化人類学会第41回研究大会名古屋大学2007年6月

[その他]

鈴木岳海「『地蔵盆研究Project』における映像制作と教育」科学研究費補助金(基盤研究C)研究成果報告書、2008年3月、査読無

鈴木岳海「神戸の地蔵盆 新長田と西青木を事例として」『お地蔵さんと地蔵盆-こどもたちの祝祭 地蔵盆から-』るーぶる愛知川ブックレット1 2008年1月 pp.13-22、査読無

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鈴木 岳海 (TAKAMI SUZUKI)

立命館大学映像学部映像学科・専任講師

研究者番号: 20454506

(2) 研究分担者

(3)連携研究者

研究協力者

アルニ・バジュラチャリヤ
ネパール環境文化研究所所属

ラクスマン・サヒ
ネパール環境文化研究所所属